



ひまわりノ畑



教育目標 思索・和敬・剛健

R7学校スローガン 笑顔とあいさつそしてありがとう

<http://www.kyoseido.kyoseidaigakko.ac.jp/index.htm>

MARQUEE HALL の余韻の中で

昔、初めて劇団四季の「オペラ座の怪人」を日生劇場で観劇した後の数日間は、主演の市村正親さんの歌声が、頭の中をぐるぐる回っていました。先週の三連休は、マーキーホールで聴いた「大地讃頌」や「証・信じる・青い鳥」の歌声が、頭の中で波紋となり、幾たびも折り返されるような余韻の中にいました。

当日、教育長の坂田先生が、来場くださりました。ご多用の中、午後の部からのご鑑賞となりましたが、閉会式で講評を頂きました。そして先日、さらに3年生へメッセージを頂きましたので、ご紹介いたします。音楽科の教師でいらした坂田先生のコメントは、1・2年生の皆さんにも参考となるとと思います。

教育長 坂田 先生から、3年生の皆さんへ メッセージ

先日の合唱コンクールでは、3年生各学級の魂のこもった合唱を聴かせていただきました。感動、誇り、期待、尊さ…、様々な想いが私の心を、いやホール全体を満たしました。

諸君の音楽、合唱と向き合う姿はすでに清瀬第五中学校の伝統です。皆さんはその伝統を見事に引き継ぎ、より素晴らしい形へと深化発展させたのです。そして下級生諸君のまさに範となり目標となるその堂々たる雄姿は、あたかもこれから後に続くものに対して「我々を超えられるものなら超えてみよ!」と言わんばかりの堂々としたものでした。

諸君が与えた影響は学内にとどまらず、保護者、市民にも及ぶものであったことは忘れてはなりません。

気候変動による自然災害が頻発しています。首都直下型地震のリスクも想定されています。そのような中、中学生は「自助(自分の安全は自分で守ること)」だけでなく「共助(自分だけでなくともに助け合うこと)」「公助(公のために己を役立てること)」の一員として、力を尽くすことが求められています。すなわち、社会のために自分の力を使うことができる中学生として成長することが期待されているのです。

五中ではそのための学びも重ねているであろうと思いますが、私は、中学生が「共助」「公助」の一員として社会に貢献するための最も価値ある行いは、諸君が「全力で物事に取り組む姿」を、一人でも多くの社会の人々に観ていただくことではないかと思っています。

それが運動でもよい、勉強でもよい、学校行事でもよい、またボランティアでもよいし、自分の得意とすることでもよい。諸君が全力で取り組む姿を目にした人々は、元気と勇気を手に入れることができる。「中学生がこんなに頑張っているのだから…」とエネルギーが沸く。「物事にこれほど真摯に取り組める中学生が20年後、社会の中心になった時、素晴らしい清瀬に、力強い日本に、助け合い支え合う世界になっていくはずだ」と夢と希望、そして期待が膨らむのです。今回の合唱コンクールは、まさにその姿を観ていただく時と場になりました。諸君の音楽と向き合う真摯な姿こそが最大の社会貢献だったのです。

当日、聴かせてもらった3年生、各学級の演奏に対して、一言ずつ、感想を述べさせてもらいましたが、言い足りなかったこともあります。それを書き足す手紙にしたいと思います。半年後にやってくる卒業式に向けて、義務教育9年間、集大成となる合唱を創り上げる参考にさせていただければと思います。

1 学年合唱

○最学年としての誇り高き合唱。分厚い混声四部合唱の響きは、聴く者に心地よさと感動を与える。一人たりともいい加減な気持ちでステージに立っていないことが伝わる。まさに「全員野球」ならぬ「全員合唱」。指揮者は合唱団を引っ張り、ピアニストは合唱を支えている。素晴らしい学年合唱だった。

2 3年C組

○課題曲は大変バランスの良い合唱に仕上がった。一体感がありまとまりを感じる。合唱は演奏するものの心が表れる。恐らく互いに認めあう仲が良いクラスなのだろう。中でもソプラノの響きは透明感があり素晴らしかった。

○自由曲。こちらも冒頭の女声のアンサンブルが大変きれいに響いている。また後半の男声のユニゾン(同じメロディーを一緒に歌うこと)もGood!。曲のイメージを表現しようと全力でこの曲と向き合っている姿を通して、C組全員がこの曲に心から共感し、想いを客席に届けようとしている様子が伝わる。そんな想いがこの曲の一つの「物語」として成長させた。「ストーリーが目につく演奏」。この言葉がピッタリの演奏だった。

○「合唱」の「合」の文字は「音を合わせる」「リズムを合わせる」という音楽的な面と「心を合わせる」「イメージを合わせる」という心情的な面の二つの意味がある。この二つの「合」ができて初めて「合唱」になる。二つの「合」を大切に、これからも合唱と付き合っていってほしい。

3 3年A組

○強弱の変化が印象的な合唱。気持ちが昂れば発する声は大きくなる、逆に気持ちが落ち着いて行けば小さくなる。これは人間として自然なこと。音楽も同様。大地讃頌のフィナーレに向かってA組諸君の気持ちがどんどん昂り、想いが高まり、堂々と曲が締めくくられる…。全員で創り上げたダイナミックな合唱は圧巻だった。



○自由曲。作詞をした詩人、谷川俊太郎氏の想いや願いを全力で表現しようという熱き心が伝わる演奏。曲想(曲が持つ雰囲気や味わい)の変化に応じて、強弱や速度、そして音色(声の色合い)に至るまで表現が工夫されており感心するとともに感動を覚える。指揮者とピアニストの息がピッタリという点も、それに大きな影響を与えている。



○きっと「ものごとを感じ取る力(=感性)」が豊かなクラスなのだろう。「感性」は「感動」により育まれる。人と人との出会いや素敵な本、映画等との出会いからも感動を得ることはできる。また風の音や風が揺らす木々の様子などの、今まで何気なく聞き逃していた音や見逃していたできごとからも感動を得ることができる。たくさん感動し、たくさん感じ取ることができる豊かな心を一層はぐんでほしい。

4 3年B組

○女声のまとまり感が心地よく、そしてバスが全体の響きをしっかりと支えている。安定感のある課題曲。誰一人手を抜くことをせず、真摯にそして全力でこの曲と向き合ったこの経験は、きっとB組に対して、クラス紹介の生徒が訴えた「幸せ」をもたらしてくれるはずだ。全員で大地讃頌に命を吹き込んだB組だからこそ、残りの数か月間の中学校生活を皆で幸せに、そして充実したものにしてくれるはずだ。



○自由曲。歌いだしのスキャット(LaLaLa…)は夢、希望があふれんばかりの表現。その後の主題を歌う美しい女声のユニゾン、男声に引き継がれ、「それは青い鳥～」に向かう劇的なクレッシェンド…。表情豊かに、そして想い深く表現してくれた。第五中 3-Bにしか創れない感動的な「青い鳥」だった。

○曲を大切に育ててくれたことが分かる演奏。一つ一つの音を、メロディーを大切に演奏していたことが証。音楽と大事に付き合っていくことの積み重ねが曲を育てていくことになる。音楽は最初は印刷された音符の集合体にしか過ぎない。諸君は、この音符の集合体に命を吹き込み、より素敵な演奏へと育て上げてくれたのだ。

5 これから研究を深めるべき点

○大地讃頌は、元来プロの合唱団が演奏するために書かれた曲。中学生にとって歌いこなすことは大変難しい。特に男声パートの音域が広く、テナーのハイトーン(高音)を正しい発声、音程で歌える中学生は数少ない。五中の3年生もこの点は今後研究すべき課題であり、音程が下がり気味になる傾向がみられた。

○専門的なトレーニング方法はいくつもあるが、先ずはハイトーンを出す際の「意識(イメージ)」の持ち方を変えてみてはどうか。

○後頭部に手が生えているイメージを持つ。その手が頭の上に伸びてハイトーンの音を上から拾い上げるように声を出す(わからなければ新井先生に聞いてください)。それだけで音程がぶら下がることを一定程度防ぐことができる。研究を勧めます。

○アルトの発声も一部気になった。先ずソプラノになったつもりでハイトーンを出す。その声のまー音ー音を下げていき、その発声でアルトパートを歌ってみよう。これでいわゆる「地声」が一定程度防ぐことができる。

○もう一点、研究すべき点を挙げるとすれば、f(フォルテ:強く)とp(ピアノ:弱く)のイメージの持ち方について。fは「強く」ではなく「豊かに」とイメージし、脱力のうへ、遠くの山に向かってたふぷりとした息で「おーい」と呼びかけるように歌う。すると、これまでのような暴力的なではなく、やわらかでありつつも豊かで包み込むようなfがホール内に響き渡るはずだ。

○p(ピアノ)は「弱く」ではなく「柔らかく」とイメージし、これも遠くの山にそっと「おーい」と呼びかけるように歌う。そうすると響きがやせ細らずに、よく通るp(ピアノ)として客席に届く。ぜひ研究してほしい。

○諸君は、今でもそれぞれの曲が持つイメージやメッセージを表現しようと、強弱を変化させたり、速度を工夫したりする努力をしている。先にも述べたとおり、「音」を「音楽」に変えるためには絶対に必要であり素晴らしいことだ。卒業の合唱においても、曲が持つイメージを学年の皆で一つにし、そのメッセージを聴衆に届けるべく努力を重ねてほしい。

○欲張りかもしれないが、次なるステップにも挑戦してほしいと願う。それは「音色」だ。例えば「こんにちは」の言葉一つでも、元気あふれる人への「こんにちは」と、落ち込んでいる人に対する「こんにちは」とでは、強さや速さだけでなく「声の色(=音色)」が違はずだ。前者の「こんにちは」は明るく透明感のある音色が似合うだろうし、後者は落ち着いた中にも意志を感じるような「音色」が求められるはずだ。友達どうしで、それぞれの「こんにちは」は、どんな「声の色」が最も合うのか、いろいろ試してみようではないか。

○研究すべき課題をいくつも上げることになってしまった。「期待が大きいと要求も高くなる」からだ。五中3年生はきっとより素晴らしい合唱を創り上げることができると信じるが故だ。ぜひ研究を重ね、半年後の卒業の日には義務教育集大成となる合唱を胸を張って、堂々と歌い上げてほしいと願う。

6 終わりに

○諸君は6ヶ月ほどで中学校を巣立っていく。この合唱祭で見せた、真剣でカー杯の取組を残りの6ヶ月間の生活でも挑戦してほしい。受験という大きな困難に挑戦する人が多いだろう。中には、もっと先の将来を見据えて、自分自身が如何に生きるかを考え、その実現に向けて挑戦していく人もいるかもしれない。

○いずれにしても、真剣で全力を傾けた取組からは、結果がどうであれ、大きな達成感や成就感、感動が生まれる。そして必ず成長を迎える。このような6ヶ月が送れたときこそ、本当の意味で合唱祭での成果が生かされ、胸を張って「自分は清瀬第五中学校の卒業生だ」と言える時なのかもしれない。

○先生方。生徒たちの素晴らしい力を引き出してくれたことを心から感謝します。特に音楽科の新井先生は、身を削るようなご指導の毎日であっと思います。

○どのクラスの演奏からも、生徒たちはみごとに教師の指導を自らの血とし、肉としてくれたことがわかります。きっとこの一日を生涯忘れずにいてくれるのではないのでしょうか。

○素敵な生徒たちと、素晴らしい先生方とで、第五中学校の輝かしい歴史をこれからも創りだしていただきたいと切に願っています。

○素敵な半日を過ごさせてくれた生徒たちに改めて感謝とエールを送ります。「素晴らしい演奏をどうもありがとう！そしてこれからもカー杯生きよ！そうすれば諸君は必ず幸せになる！」と。

令和7年10月15日

清瀬市教育長 坂田 篤